

リレー随筆

僕のバイク旅

鹿児島生協病院 初期研修医 中間 大幹

ご挨拶

初めまして。鹿児島生協病院初期研修2年目の中間大幹（なかもだいき）と申します。同期である井上 歩先生から今回の執筆の話をもちかけられた際、絶対に嫌だと思いましたが、お人好しで断りきれなかった僕は期限ぎりぎりの今、パソコンに向かい合っています。過去の先生方の記事を参考にとデータを頂いたので拝読し、笑ったり感動したりしているうちにまた時間が過ぎていきます。急ぎます。タスクへのとりかかりが遅いことが僕の短所であると今回も思い知らされています。

さて、何について書こうと考えているところですが、最近は新型コロナウイルスの影響のため、皆さまも旅行をする機会がなかなかないのではと思います。そこで、大学6年生のGW休み中に、バイクに TENT を積んで友人と共に西日本を野宿しながら南下してきた旅の記録をお裾分けしたいと思います。

拙い文章ではありますが、最後までお付き合い頂けると幸いです。

旅の概要

共に旅をした友人はポリクリ班の同期でした。いつものポリクリ中、何気ない話の中でその友人が放った「四国カルスト行きてーな。」の一言をきっかけにその旅は計画されました。皆さんは四国カルストという場所をご存知でしょうか。愛媛県と高知県にまたがるカルスト台地で、標高1000m～1500mに広がるパノ

ラマの風景は「日本のスイス」と例えられています。今回はそこを目標とした、バイク旅について紹介します。

メンバーは僕、友人と、友人のボーイスカウト仲間3人の計5人です。3人は関東に住んでいたもので、大阪で合流することに。その後、四国カルストへ向けてバイクで出発し、宿泊は全てテントですといったものでした。

出発

まず鹿児島組僕たち2人は大阪へ向かうこととなります。さすがにバイクで往復はきつと考え、往路は志布志⇄大阪を繋ぐフェリーさんふらわあ号にバイクを乗せて大阪まで行くことにしました。鹿児島大学郡元キャンパス近くにある、気さくなママが営む喫茶店のカレーを食べてから出発しました。フェリーは志布志を夕方18時頃に発ち、大阪に朝8時頃到着でした。数人一部屋の大部屋で、ルームメイトには「なんとか(失念)倶楽部」というTシャツを着たおじさま方がいました。この方たちもバイク仲間らしいのですが、Tシャツのダサさはさておき、GWにこの過ごし方、自由でいいなと思う反面、家族は大丈夫かなと心配にもなりました。おじさんのいびきで眠れない夜でした。初日の夜はフェリーでビールを飲んで、これから始まる未知の世界を思っワクワクで始まったことを覚えています。

大阪着～琵琶湖

大阪に到着した日の翌日が関東組との合流日でした。1泊はどこかで過ごさないといけません。理由は覚えていませんが、琵琶湖の畔に泊まることになりました。その日はちょうど競馬のG 天皇賞がある日だったので京都競馬場に寄ることに。たくさんの人が集まる上、車よりも交通の便が良いからか、信じられない数のバイクが駐輪場にありました。あの数のバイクは一生見ることがないかもしれません。そしてそのほとんどが二人乗りと、こちらではあまり見かけない文化だなと感じました。競馬場へ向かうと、そこら中に人がぎっしりで、現在のコロナ禍では考えることができない光景でした。競馬に明るくない僕には衝撃で、知らない世界にきたようでした。ここでの経験は非常に面白かったです。レース前に馬と騎手が観客への挨拶やウォーミングアップで目の前を走ります。僕たちは所持金に余裕もなく、競馬自体は楽しむ程度の勝負？でしたが、中には大きな勝負をしている人たちも多くいたと思います。「頼んだぞー！」「負けんなよー！」それぞれの予想や気合いが怒号にも近いような形で飛び交い、レース開始の時間を皆が今かいまかと待っていました。とりわけ僕が好きだったものが、ある馬が目の前にきた時のおじさんの言葉で、「お前は2着でええぞー！！」と言っていたことで、競馬にはこういう応援の仕方もあるのかと大変感激しながら笑っていました。

レースの発走に先立って流れる音楽のことをファンファーレと言いますが、このファンファーレが始まるともう会場は大興奮です。応援する馬が違えば敵同士ですが、このファンファーレの時は会場中でリズムの合った手拍子がなされていて、結局競馬ファンの心は1つなんだなぁと無駄に感激しました。レー

スが始まると、「行けっ！！行けっ！！」「おいおいおいおい」「もう駄目だー」「ふざけんな！！」というような叫びに、僕はレースそっちのけでおじさんたちの戦いに熱中してしまいました。

無事、琵琶湖についてからは日本一の湖の畔でテントに泊まってビールを飲めるなんて、なんて贅沢だろうとゆっくり過ごしていました。幸せな気持ちでテントの中で寝ようとしていたのも束の間、近くで声がします。あちらの大学生でしょうか、近くで花火を始めました。楽しそうでいいな—と聞いていましたが、耳を疑うような声が。「お！テントがあるぞ狙えー！」

僕たちのテントを狙って打ち上げ花火のような飛ぶものを発してきました。関西の人とは仲良くなれないだろうなと思った一例でした。

関東組との合流

合流場所は関東組のうちの1人が通う大阪大学のキャンパスでした。残りの2人は一回り年上の兄さんたち。到着すると彼らはバイクを組み立てていました。バイク1台は分解して車に乗せてきたようで、その組み立てと調整をしていました。バイクの調整などしたことのない僕は、分解と組み立てまで自分ですてしまう彼らに衝撃を受けたのを覚えています。

いよいよ出発の時ですが、残念ながら天気は雨となりました。雨の中、バイクで高速に乗り、明石海峡大橋まで向かうのはスリッパしかないかと非常に怖かったです。明石海峡大橋を渡る瞬間は雨が止み、最高に気持ちよく走れたのを覚えています。四国カルストの前に香川で一泊することになりましたが、ここでは土砂降りです。雨の降る中バイクで移動

することはもちろんですが、テントを張ること、食事を考えること、お風呂を考えることなど非常に大変なことばかりでした。翌日の朝も悪天候は続き、キャンプの撤収が大変だったり次の目的地までの進行が遅れたりとなかなか旅がうまくいかないことが多かったです。しかしながら場の雰囲気が悪くなることは一切なく、彼らはむしろその順調にいかない場面を楽しんでいました。その時、兄さんの1人が放った言葉が、「誰も幸せにならない考えなんて持つ意味ねーんだよ」。この言葉を聞いてなんて大きな人たちなんだろうと衝撃を受けました。この言葉が今もずっと僕の生き方考え方の軸となっています。

四国カルスト

そんなこんなを過ごし、ようやく目的地である四国カルストへ到着しました。パノラマの風景と、放牧されている馬たちがいて「日本のスイス」とは良く称したものです。テントを張り、バーベキューをしました。逆境の後に、あの絶景と澄んだ空気の中で味わう肉とビールは非常に贅沢で格別だったのを覚えています。翌日に山頂から見た朝日も綺麗で感動的でした。

山を下るときに砂に乗り上げ横転してしまい、膝を受傷し高知の病院で3針ほど縫合してもらいました。バイクに慣れてきた頃で、何事も慣れはよくないと感じた例でした。診てくれた研修医の先生、きちんと破傷風トキソイドを打ってくれてありがとうございました。

山を下ったところで関東組とはお別れでした。僕たち鹿児島組2人は愛媛⇄大分のフェリーに乗って九州へ渡り、南下し鹿児島へ帰ってきました。

終わりに

今回の旅は計8日間、総走行距離約1300km、テントと寝袋のみで宿泊場所未定、夜は寒いのは当たり前で、天気が晴れることさえも恵まれていると思える程に普段とはかけ離れた生活でした。厳しい環境やアクシデントなんて当たり前でむしろウェルカム、対応しながらその状況さえも楽しみ、馬鹿みたいに笑う彼らと共に過ごすことで、自分も少しは成長させてもらったような気がします。

以上、僕のバイク旅のお裾分けでした。最後まで読んでいただきありがとうございます。このコロナ禍が収束し、また皆さんが笑って旅行に行くなどして、心身を休めることができる日が早く来ることを願っております。厳しい状況が続きますが、皆様どうかご自愛ください。

次号は、鹿児島生協病院 中山万莉先生のご執筆です。
(編集委員会)

